

古代土器の打ち欠き・穿孔
—千葉県印西市鳴神山遺跡群出土土器の検討—

糸 川 道 行

目 次

1. はじめに	283
2. 資料の抽出方法	283
3. 概観	284
4. 時期別様相	289
5. 出土状況	290
6. 考察	300

要旨 奈良・平安時代の打ち欠き及び穿孔された土器の多くは、祭祀に使われた土器である。本稿は、千葉県印西市鳴神山遺跡群出土土器を素材に、集落遺跡におけるその様相を検討したものである。その結果、打ち欠き・穿孔土器が、神事・仏事、個人や1棟の竪穴住居レベルの祭祀、集団レベルの祭祀で広く使われたこと、墨書土器・灯明器・手捏土器などの土器とセットとなる場合があること、がわかった。また、セットの土器群は延命や招福除災を祈願して、竪穴住居のカマドや出入り口部・四隅等に配置される場合がある。なかでも、北西隅配置に対する観念は、カマド祭祀とともに後世まで長く受け継がれていく。

1. はじめに

本稿は、古代に存在する打ち欠き・穿孔された土器が、集落においてどのような様相であるのかを明らかにする目的で記述する。表題の古代については、本稿の場合、飛鳥時代から平安時代とするが、扱った資料の多くは奈良時代から平安時代前期のものである。打ち欠き・穿孔及び破壊された土器について、筆者は以前、千葉県印西市船尾白幡遺跡の様相を述べたことがあるが（文献1）、本稿では、船尾白幡遺跡とは谷をはさんで西方に位置する鳴神山遺跡群を検討対象とする。なお、本稿で取り上げる穿孔や打ち欠きされた土器は、祭祀に使われたものと考えている。すなわち、穿孔や打ち欠きが施された時点で、その土器は人が日々の生活に使う器ではなくなり、神仏に属する器になったということである。したがって、ここでは土器片転用の紡錘車や転用硯等、加工目的の第一義が実用であるものについては対象としない。

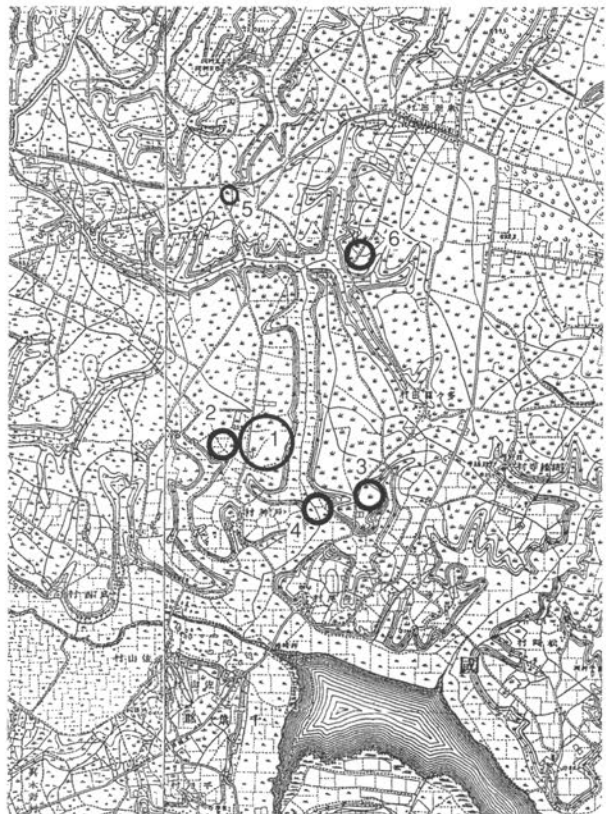
鳴神山遺跡（第1図1）は印西市船尾に所在し、隣接する白井谷奥遺跡（第1図2）と一体の遺跡である。本稿では、鳴神山遺跡群とした場合の記述に鳴神山遺跡及び白井谷奥遺跡をあわせて考える。鳴神山遺跡群は所在する台地南側で未調査部分があるものの、全体の調査面積は広大であり、総計264棟の竪穴住居等の遺構が報告されている（文献2・3・4）。

2. 資料の抽出方法

打ち欠きの状況には様々なバラエティがあるが、標準的な様相を述べると、口縁・体部の一部を打ち欠き、割れ口が整った弧状・「U」字状・「V」字状を呈する、というものである。

資料の抽出にあたっては、上記の標準的様相を念頭に、報告書に図示されている杯皿類についてはすべて実見した。その他の器種については、調べていく過程で認めたものもあるが、実見したものはごく少量である。

打ち欠き・穿孔及び関連する土器は102点で、第1表に集成した。これらの土器のうち、穿孔された土器は概して明瞭であるが、打ち欠きされた土器については、単なる破損との区別が難しい場合があり、数量の把握はかなり不安定である。そもそも抽出の目安と考える整然とした打ち欠きが、打ち欠きのすべてではない。しかし、口縁・体部の欠損しているもののすべてが打ち欠き土器であるわけもなく、打ち欠きと破損が似ている場合は、その区別が難しい。したがって、本稿では曖昧さを少しでも排除するた



第1図 鳴神山遺跡群と周辺の奈良・平安時代遺跡位置図 (1/50,000)

(明治15年参謀本部陸軍部測量局測量 白井村・白井橋本村より)

- 1 鳴神山遺跡 2 白井谷奥遺跡 3 船尾白幡遺跡 4 西根遺跡
5 大塚前遺跡 6 南西ヶ作遺跡

め、なるべく整然とした割れ方のものを打ち欠き土器とした。ただし、若干乱れた割れ方のものであっても、1棟の竪穴住居に複数個体みられる場合や出土状況の検討のうえから、打ち欠き土器と認めた場合がある。このような見方で抽出したものが第1表に掲載した土器である。あるいはこの中には単なる破損のものが含まれているかもしれない。しかし、あるとしても少ないと考える。逆に第1表に掲載することを見送った土器の中に、打ち欠き土器がかなり存在すると推測する。区分に若干の曖昧さが残ることが否めないで、それらの土器についても遺構番号と報告書遺物番号のみを記述し、今後の検討課題とする⁽¹⁾。

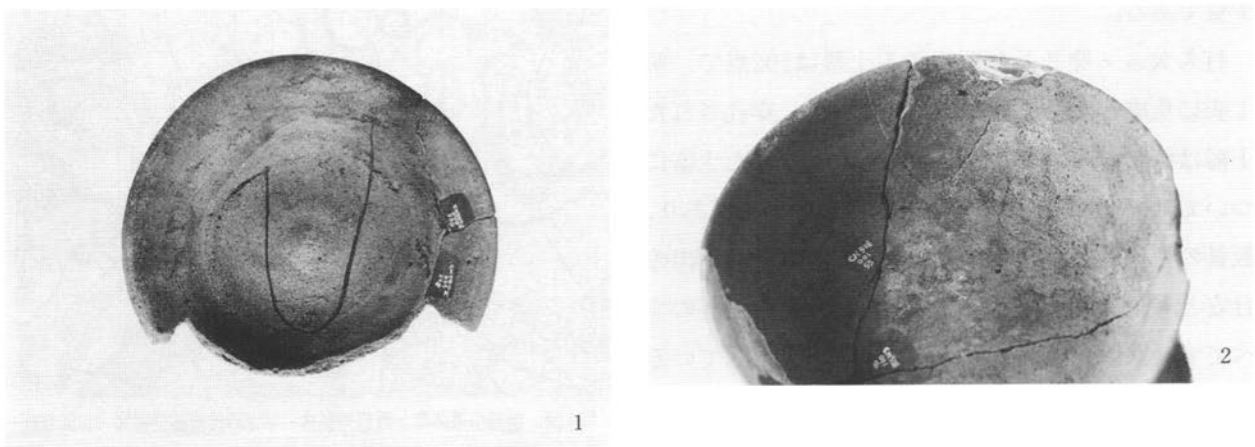
資料の抽出について、もう1点記述しておく。第1表掲載の打ち欠き土器は口縁・体部の一部の打ち欠きのものがほとんどである。しかし、資料の抽出終了後、荒木志伸氏の論文に接し、明らかに口縁・体部の全周を打ち欠きした土器が存在することを知った(文献5)。ここで、再度悉皆的な調査を行うべきであったが、時間不足のため今回は見送った。ただし、その後も幾つかの土器を実見していく過程で、全周打ち欠きの土器が数点見つかったので、それについては第1表に掲載した。

以上の状況から、第1表は今後、補正・補完される必要のあるものである。しかし、船尾白幡遺跡の様相から量的にもっとも多いのは、口縁・体部の一部が打ち欠きされた土器と推測できるので、鳴神山遺跡群においても主要な様相を検討することが可能と考える。

3. 概観

口縁・体部を打ち欠きされた土器は93点で、資料の大多数を占める。なお、打ち欠きされていないが、白井谷奥遺跡001の土師器杯4は体部内面に「U」字状の線刻があり、打ち欠きの形状を意図したものと理解できる(第2図2)。本稿では、打ち欠き土器総体を考える場合、この土器も含めて扱うこととする。穿孔された土器は16点である。このうち7点を除く9点については、やや不確実なものがあるが口縁・体部の打ち欠きもされている。その他、完全に破壊された須恵器大甕1点を第1表に含めている。

打ち欠き土器の器種は土師器杯・高台付杯・皿・高台付皿・鉄鉢形土器、須恵器杯・蓋・高台付盤・長頸壺、灰釉陶器碗である。穿孔土器の器種は土師器杯・手捏土器・土師器甕、須恵器杯・蓋である。打ち欠き・穿孔及び完全に破壊された土器のうち、手捏土器は2点、土師器甕、須恵器長頸壺・大甕は各々1



第2図 鳴神山遺跡Ⅱ077-5へラ書き・白井谷奥遺跡001-4線刻

第1表 鳴神山遺跡群打ち欠き・穿孔・破壊及び関連土器一覧

番号	遺構	報告書番号	遺物番号	器種	打ち欠き/穿孔	打ち欠き・穿孔状況	土器の状態	文字・記号種別	釈文	部位・方向	出土状況	時期	備考
1	I 007	37図2	118	土師器杯	打ち欠き	2箇所	接合無・他欠損無				カマド内 倒位	5期	被熱
2	I 007	37図6	136	土師器杯	打ち欠き	2箇所	接合無・他欠損無	線刻	大加	底部内面	左前下層 正位	〃	被熱
3	I 007	37図7	135	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損ほぼ無	線刻	大加	底部内面	左前下層 正位?	〃	被熱か
4	I 007	37図8	134	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無	墨書 線刻	大加	体部外面正位 底部内面	左奥下層 正位	〃	
5	I 007	37図10	133	土師器杯	打ち欠き	2箇所	接合無・他欠損無	線刻 線刻	山本 山本	体部外面正位 底部内面	カマド内 倒位	〃	1箇所線刻上部を打ち欠き 器面荒れ・被熱?
6	I 007	37図20	116	土師器高台付杯	打ち欠き	2箇所	接合有・他欠損無				右奥下層 正位	〃	器面荒れ顕著・被熱
7	I 014	43図9	88	土師器手捏	体部穿孔・打ち欠き?	1箇所	接合無・他欠損無?				前中央下層 倒位	3期	他の土器と一括埋納
8	I 023	51図1	1・8	須恵器杯	底部穿孔	1箇所	接合有・他欠損ほぼ無				中央中層 正位	2期	
9	I 029	56図2	173	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				前中央中層 不明	3期	被熱
10	I 029	56図5	262	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損有	墨書		底部外面	中央下層 不明	〃	
11	I 044	73図8	323	土師器杯	打ち欠き+破壊	3箇所	接合無・他欠損有	線刻 線刻	富 鬼□	体部外面正位 底部内面	左奥柱穴内	5期	2片に破壊、遺存片の口縁部2箇所?打ち欠き
12	I 044	74図26	253	土師器杯	打ち欠き	9/10周	接合無・他欠損無	墨書	大加	体部外面正位	右前床面	〃	「加」の上で欠損
13	I 044	74図27	324	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				カマド左袖前床面 正位	〃	被熱?
14	I 044	74図29	267	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損有	墨書	成	体部外面・横位	左前床面 正位	〃	文字部分で割れ、被熱
15	I 044	74図30	328	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無	墨書 墨書	大 大	体部外面正位 底部内面	出入り口部下層 正位	〃	器面荒れ・被熱?
16	I 044	74図37	121・183他	土師器杯	打ち欠き	1箇所か	接合有・他欠損有	墨書 墨書	知益 七	底部外面 底部内面	右中央上層	〃	
17	I 044	74図42	327	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無	墨書	大加	体部外面正位	出入り口部中層 倒位	〃	文字部分ひびあるが割れ無し 74図30上から出土
18	I 044	75図66	273	須恵器長頸壺	打ち欠き	全周	接合無・他欠損無				左奥床面	〃	口縁部全周破壊
19	I 047A	79図21	524	土師器杯	底部穿孔・打ち欠き?	1箇所以上?	接合有・他欠損有?	墨書	大加	体部外面正位	中央中層 不明	5期	口縁・体部は2箇所打ち欠きか
20	I 047A	79図22	845	土師器杯	打ち欠き・底部穿孔?	2箇所?	接合有・他欠損無?	墨書	大	体部外面正位	カマド内底面 不明	〃	
21	I 047A	80図31	784	土師器杯	打ち欠き	1箇所?	接合有・他欠損無				中央左寄り中層 不明	〃	灯明器、打ち欠き部?も接合
22	I 053	91図44	44・403他	土師器手捏	穿孔	現存4箇所	接合有・他欠損有				右奥床面・上層、左奥床面	4期	焼成前穿孔8箇所(上下2段、4等分の位置)か 底外木葉痕 被熱
23	I 055A	93図4	12	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無	墨書	中万	体部外面正位	右奥上層 不明	6期	
24	I 055A	93図5	4	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				右奥上層 不明	〃	
25	I 055A	93図8	96	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				右前床面 不明	〃	
26	I 063	102図1	190	須恵器杯	打ち欠き	2箇所	接合無・他欠損無				左奥床面 正位	3期	被熱 他に遺存良好な杯・甕4個体床面にあり
27	II 001	103図1	44	土師器杯	打ち欠き・体部穿孔	2箇所	接合有・他欠損無				右前下層 不明	6期	被熱
28	II 006	107図1	26	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無	線刻		底部外面	左奥床面 正位	2期	
29	II 015	116図2	23	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				中央下層 不明	3期	灯明器
30	II 020	120図5	403・418他	須恵器蓋	天井部穿孔	1箇所	接合有・他欠損有	線刻	井・右	天井部内面	中央上中層・右前柱穴上	3期	覆土埋め戻し 他に手捏土器3点
31	II 020	120図7	460	土師器杯	打ち欠き	全周	接合無・他欠損無	墨書		体部外面	カマド右脇下層 倒位	〃	口縁部全周打ち欠き 覆土埋め戻し
32	II 037	133図1	22	須恵器杯	底部穿孔・打ち欠き?	2箇所以上?	接合無・他欠損無	線刻	十(×)	底部外面	上層 不明	2期	打ち欠き部?は接合 II 036・II 037の境で出土
33	II 043	137図3	35他	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損有	墨書		体部外面	左前・左中央、中層・下層 不明	6期	文字部分で割れ?被熱?
34	II 043	137図7	96	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				右奥下層 倒位	〃	
35	II 044	138図1	1, 40	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				左奥下層 横位	2期	接合破片は小片 138図5の上部に有り 被熱?
36	II 044	138図3	37, 41	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				左奥床面 正位	〃	
37	II 044	138図5	38, 39	須恵器杯	打ち欠き	1箇所?	接合有・他欠損無				左奥床面 正位	〃	138図1の下 被熱により内面剥落 接合で完形
38	II 059	146図8	1, 3, 107	土師器杯	底部穿孔	1箇所	底部破片				右奥下層	5期	底部中央近くに丁寧な穿孔
39	II 064	155図7	59	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無	線刻		体部外面正位	中央中層 不明	3期	

番号	遺構	報告書番号	遺物番号	器種	打ち欠き/穿孔	打ち欠き・穿孔状況	土器の状態	文字・記号種別	釈文	部位・方向	出土状況	時期	備考
40	II 065	157図2	60	土師器杯	打ち欠き	1箇所か	接合有・他欠損無	墨書	富	体部外面正位	カマド前床面 不明	5期	接合で完形
41	II 077	169図3	164	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				左奥上層 横位	6期	
42	II 077	169図4	175	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				右前上層 不明	〃	
43	II 077	169図5	224	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無	ヘラ書き	U字状	底部内面	カマド内支脚上 倒位	〃	
44	II 083	176図17	57	土師器杯	打ち欠き	2/3周	接合無・他欠損無	線刻 ヘラ書き	干	体部外面 底部内面	奥中央上層 不明	4期	
45	II 093	185図7	52	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				カマド内下層 倒位	6期	土師器杯5枚重ねの1点
46	II 093	185図9	71	土師器杯	打ち欠き	1箇所?	接合有・他欠損無				カマド内 倒位	〃	打ち欠き部?も接合 支脚転用か?
47	II 095	188図3	66	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無	線刻	×	体部外面	前中央中層 横位	2期	須恵器高台付杯(188図2)と重なって出土
48	II 101	192図5	82	土師器杯	打ち欠き	2箇所か	接合有・他欠損無	墨書 墨書	七万 七万	体部外面正位 底部内面	右奥下層 不明	5期	被熱か
49	II 110	198図1	167	土師器杯	打ち欠き	2箇所	接合無・他欠損無				左奥床面 正位か	6期	口縁部遺存部の方が少 灯明器で断面も油煙付着
50	II 110	198図16	168・176	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損有	墨書	本家	体部外面正位	左奥(隅)床面 正位・カマド内	〃	北西隅(左奥)に主要部分、カマド内に小破片
51	II 110	198図17	185	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				カマド内火床部上	〃	被熱・支脚転用 5枚重ねの中央
52	II 110	198図21	110他	土師器杯	打ち欠き	2箇所	接合有・他欠損無	ヘラ書き	一	底部内面	前中央上中層	〃	
53	II 110	199図28	69・103他多	須恵器大甕	破壊		多数破片の接合				竪穴全体中層	〃	焼土・炭化材上から出土
54	II 113	201図5	29	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無	線刻 線刻	□ □	底部外面 底部内面	カマド左脇床面 正位	5期	
55	II 113	201図6	39	土師器杯	打ち欠き・底部穿孔?	2箇所?	接合有・他欠損無	線刻 線刻	久弥良 十(×)	底部内面 底部外面	カマド右脇下層 正位	〃	土師器甕破片上 線刻を貫く意図的な割れあり
56	II 113	201図8	36	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				右前床面 正位	〃	
57	II 115	202図2	110	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				右奥下層 正位	5期	被熱か
58	II 115	202図5	109・116・157	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				左奥床面 不明	〃	被熱か 内面剥離あり
59	II 120A	206図19	202	土師器高台付皿	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				中央上層 正位	5期	
60	II 120B	206図20	198	土師器高台付皿	打ち欠き	2箇所か	接合有・他欠損無				カマド前床面 不明	〃	被熱?
61	II 123B	210図28	67	土師器杯	打ち欠き・底部穿孔	3箇所	接合無・他欠損無				左前床面 正位	2期	内外面赤彩 竪穴住居自体は6期で混入品
62	II 128	219図6	305	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				右奥床面 倒位?	5期	被熱?
63	II 128	219図10	266	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				カマド内 正位	〃	
64	II 139	228図13	27	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				カマド内 正位(やや斜)	3期	
65	II 139	228図14	26	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損ほぼ無				カマド内 正位(やや斜)	〃	被熱?
66	II 141	231図1	64	須恵器杯	打ち欠き	3箇所か	接合無・他欠損無				カマド前下層 正位	3期	
67	II 141	231図2	77・84	須恵器杯	打ち欠き	2箇所	接合有・他欠損無	線刻	*	底部外面	左中央下層・右奥床面	〃	接合破片が10と重なって出土
68	II 141	231図7	78・141	土師器杯	打ち欠き・底部穿孔?	2箇所?	接合有・他欠損無?				左中央床面 倒位	〃	被熱・摩耗 赤彩
69	II 141	231図9	81	須恵器高台付杯	打ち欠き	2箇所	接合無・他欠損有				右奥床面 正位	〃	
70	II 141	231図11	75	須恵器蓋	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				左前下層 倒位	〃	
71	II 141	231図15	1・80	須恵器高台付盤	打ち欠き	5箇所か	接合有・他欠損無				右奥床面 正位	〃	盤口縁3箇所、高台2箇所の打ち欠きか
72	II 142	232図2	62	土師器杯	打ち欠き	2箇所か	接合無・他欠損無				前中央床面 正位	5期	被熱 現在の接合箇所は取り上げ後の破損か
73	II 142	232図5	42	灰釉陶器碗	打ち欠き	3箇所	接合無・他欠損無				前中央下層 倒位	〃	3箇所とも細かな打ち欠き
74	II 143	234図8	145	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損有	線刻		底部内面	左前中層 不明	5期	
75	II 144	236図5	139	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				前中央中層 正位(斜)	5期	被熱
76	II 144	236図6	143	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無				右奥中層 正位(斜)	〃	被熱か
77	II 157	245図3	58	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無	墨書	□	体部外面	左前(隅)中層 正位	2期	覆土埋め戻し 245図8と打ち欠き部をそろえて正置
78	II 157	245図4	60	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合無・他欠損無	墨書	□	体部外面	前中央中層 正位	〃	覆土埋め戻し
79	II 157	245図5	10・30	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合有・他欠損無				左前中層・中央中層	〃	覆土埋め戻し

番号	遺構	報告番号	遺物番号	器種	打ち欠き/穿孔	打ち欠き・穿孔状況	土器の状態	文字・記号 種別	釈文	部位・方向	出土状況	時期	備考
80	II157	245図6	12・157	須恵器杯	打ち欠き	全周	接合有、他欠損無	ヘラ書き	日下部吉人	底部外面	カマド前床面 正・左前上層	々	覆土埋め戻し
81	II157	245図8	59	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合無、他欠損無			底部外面	左前中層(隅) 正位	々	覆土埋め戻し 245図3と打ち欠き部をそろえて正置
82	N201	260図1		土師器杯	打ち欠き	2箇所?	接合有、他欠損無	墨書	衣	体部外面横位	右前下層 正	5期	打ち欠き部? 2箇所は接合、墨書部分で打ち欠きか
83	N201	260図3	2	土師器鉢鉢彩土器	打ち欠き	1箇所	接合無、他欠損無	墨書	佛	体部外面正位	左前床面 正	々	口縁部外面から内面側へわずかな打ち欠き
84	III170	261図13	250	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無、他欠損無	墨書	□万	体部外面正位	前中央中層 不明	5期	被熱?
85	III173	262図2	97	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無、他欠損無		光	体部外面正位	右奥床面 正位	5期	被熱?
86	III173	262図7	95	土師器杯	底部穿孔・打ち欠き	3箇所か	接合有、他欠損無	墨書		体部外面正位	右奥床面 正位	々	口縁・体部破片は接合(非墨書部分) 底部穿孔未遂1
87	III173	262図12	103	土師器皿	打ち欠き	1箇所	接合無、他欠損無			カマド内 正位	カマド内 正位	々	口縁・体部1/2周欠損 4カット
88	II040	289図2	418	須恵器杯	打ち欠き	2箇所	接合無、他欠損無			覆土中層 倒位か	カマド内 正位	4期	覆土下半部埋め戻し
89	II040	289図6	288	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無、他欠損無			覆土中層 正位やや斜	覆土下半部埋め戻し	々	覆土下半部埋め戻し
90	II040	289図9	286	土師器杯(非クロ)	打ち欠き	2箇所?	接合無、他欠損無			覆土中層 正位	覆土下半部埋め戻し	々	覆土下半部埋め戻し
91	II004	299図63	337	須恵器杯	体部穿孔	1箇所	接合有、他欠損有	線刻	M字状	体部内面	不明 不明	2期	穿孔は内面側から打撃 穿孔後線刻
92	II004	299図72	320	土師器杯	打ち欠き	1箇所?	接合有、他欠損無			体部内面	不明 不明	6期	打ち欠き部?も接合
93	II004	299図87	164	土師器高台付杯	打ち欠き	2/3周	接合無、他欠損無	墨書	山本	体部外面・正位	上層 不明	3期	口縁・体部2/3周墨書部分で打ち欠き 灯明器 高台部除去か
94	III174	XIV43図4	535	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無、他欠損無	墨書	大加	底部内面	右奥床面 不明	4期	口縁部全周打ち欠き+V字状にカット 被熱
95	III188	XIV51図4	175	土師器杯	打ち欠き	全周	接合無、他欠損無	墨書	大	体部外面正位	右奥床面 不明	5期	口縁部全周打ち欠き+V字状にカット 被熱
96	III188	XIV51図14	182・188・250	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有、他欠損無	墨書	玉?	底部外面	カマド前下層・右中央上層 不明	々	打ち欠き部も接合有り 2カットの連続
97	III222	XIV68図23	99・105他	土師器蓋	胴部穿孔	1箇所	接合有、他欠損有			底部外面	カマド前他中層・下層	1期	胴部中位に径2cm弱の焼成後穿孔 常総型
98	III227	XIV74図2	227	土師器杯	体部穿孔	1箇所	遺存30%程度			体部外面正位	カマド前上層	2期	体部に丁寧な穿孔 全面赤彩 被熱か
99	III233	XIV76図16	19	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合無、他欠損無	墨書	千万	体部外面正位	右中央中層	5期	
100	III241	XIV83図8	6	須恵器杯	打ち欠き	1箇所?	接合無、他欠損有			体部外面正位	西側一括 不明	2期	
101	白001	328図4	55・56・85	土師器杯	打ち欠き	1箇所	接合有、他欠損有	線刻	U字状	体部内面	前中央床面・下層	3期	打ち欠きの代わりの線刻
102	白026	XIV104図4	137	須恵器杯	打ち欠き	1箇所	接合有、他欠損無	線刻	井状	体部外面	右前中層 正位	3期	中層だが柱穴上部から出土 やや傾く

点で、報告書の記載や杯皿類を調べていく過程で選択したものである。それらの器種について、他のものは実見していない。量的には土師器杯が65点で、2/3を占める。次に多いのは須恵器杯で、21点を数える。土師器皿・高台付皿は3点と少ない。

文字・記号のある土器の個体数は45点、資料数は58点である。数量は1/2近い比率を占めるが、現在みられない土器についても、欠損部に存在した可能性があるため、実際の比率はより高まると考える。

穿孔土器は、I 053-44(遺構番号-報告書遺物番号。以下同様)を除いて、すべて焼成後の穿孔である。土師器Ⅲ222-23は常総型の甕で、胴部中位に直径2cm弱の穿孔がある。また、手捏土器I 014-9は体部下部に穿孔されている。杯類の体部に穿孔されたものは3点で、そのうちの土師器杯Ⅱ001-1には、打ち欠きもみられる。量的には、須恵器杯・土師器杯の底部に穿孔されるものももっとも多く、9点である。そのうち、7点は打ち欠きもみられる。なお、土師器杯Ⅲ173-7は底部穿孔1箇所他に未遂の底部穿孔がある。その他、須恵器蓋Ⅱ020-5は天井部に穿孔されている。

I 053-44は大型の手捏土器で、穿孔は径1cmの焼成前のものである。現状で、4箇所遺存するが、穿孔部で割れ、欠損の多いところもある。上下2段で、土器径を四等分

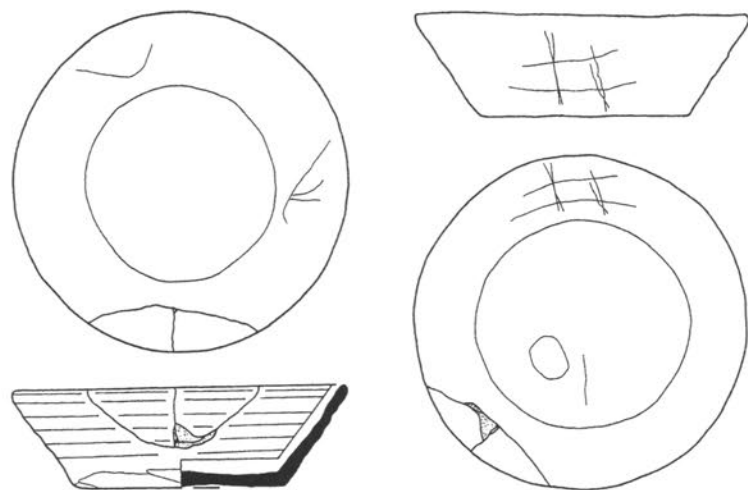
する位置にあり、8箇所を復元できる。なお、上部が欠損しているため、それ以上穿孔があるかどうか不明である。外面の多くや内面の一部が（暗）灰白色に変色し、被熱痕跡が明瞭である。同じ手捏土器であるI 014-9と比較すると、I 014-9の穿孔がこの土器でなくても良かった可能性があるのに対し、当初から穿孔が予定されている点で異なる。また、穿孔数の多さからも、より強い祭祀性をみることができると考えられる。

打ち欠き土器は、口縁・体部の一部1箇所を打ち欠くタイプが多数を占めるが、2箇所以上を打ち欠く土器もしばしばみられる。土師器杯Ⅱ083-17・ⅡM004-87は打ち欠きが口縁部周2/3に及び、口縁・体部の遺存が1/3周である。さらに、土師器杯I 044-26は打ち欠きが口縁部周9/10で、口縁部の遺存はわずかである。口縁部が全周打ち欠きされたものは、I 044-66・Ⅱ020-7・Ⅱ157-6・Ⅲ188-4の4点である。このタイプのもは先述したように、集成表に未掲載の土器にある程度含まれていると考える。また、2箇所以上の打ち欠きは、意図していない破損との区別が1箇所のものとは比べ、より難しくなることから、実数を下回っている可能性がある。したがって、現時点では打ち欠きのタイプの正確な比較は難しい。しかし、船尾白幡遺跡の様相をあわせてみると、鳴神山遺跡群周辺地域では、1箇所の打ち欠きで廃棄された土器が量的にもっとも多いと考える。

打ち欠きの形状について、さらに掘り下げてみる。土師器杯Ⅲ188-4は口縁部全周打ち欠きの土器であるが、1箇所「V」字状に他より深くえぐれている。また、土師器杯Ⅱ077-5は打ち欠きの他に、底部内面に「U」字状のヘラ書きがあるが、これは打ち欠きの形状を表現したものとする（第2図1）。記号資料は先述した白001-4の例の他に、白026-4もある（第3図）。この土器には、白001-4と似た弧状の線刻が体部内面に2箇所ある。その一つは弧の片側が明瞭でないが、よくみると、弧の屈曲部から口縁に向かって上向いている。さらに、2条の縦線があるが、これも打ち欠きの形状を表したものと理解できる。また、接合しているが、実際の打ち欠き部もある。以上から、本地域では、口縁・体部の一部を弧状・「V」字状・「U」字状に深くえぐり取ることを強く意識している様相がうかがえ、口縁・体部の一部を打ち欠くタイプを基本形とすると考える。

2箇所以上打ち欠きのある土器については、一度の打ち欠きであるのか、祭祀行為が繰り返されるたびに打ち欠きされたかの判断が難しい。祭器は使い捨てが原則であるならば、一度きりと考える方が妥当かもしれないが、なお今後の検討課題とする。ただし、全周打ち欠きの土器の中には、細かく打ち欠いて口縁部をおおむね水平にしているものがある。これについては一回で多くの部分を打ち欠いたものとする。

打ち欠き土器の中には灯明器がいくつかある。それらを列挙すると、I 047A-31・Ⅱ015-2・Ⅱ110-1・ⅡM004-87の4点で、土師器杯3点、



第3図 白井谷奥遺跡026-4実測図（1/3）

土師器高台付杯1点である。なお、当然のことであるが、灯明器の中には打ち欠きされないものもあり、打ち欠きされる必然性は個々の状況で異なっている。しかし、火を使用する祭祀行為と打ち欠く行為が重なる場合もかなりあると推測できる。祭祀行為に伴う土器も、複数個体のセットの場合には、打ち欠き土器と灯明器が複合する事例はより多くある。

また、明瞭な油煙の付着が無くても、火を受けた痕跡のある土器がかなりみられる。しかし、その中にはカマドの支脚に転用されていたものもあるので、被熱痕跡があるからといって、すべて火を使用した祭祀行為であると断定することはできない。出土状況の検討が必要である。

4. 時期別様相

鳴神山遺跡群出土の飛鳥時代末から奈良・平安時代土器について、本稿では6期に区分した。以下に各期の資料を記載する。

・ 1期（7世紀末～8世紀前葉）

Ⅲ222-23

・ 2期（8世紀中葉）

I 023-1, II 006-1, II 037-1⁽²⁾, II 044-1・3・5, II 095-3, II 123B-28⁽³⁾, II 157-3～6・8,
II M004-63, III 227-2, III 241-8

・ 3期（8世紀後葉～9世紀初頭）

I 014-9, I 029-2・5, I 063-1, II 015-2, II 020-5・7, II 064-7, II 139-13・14,
II 141-1・2・7・9・11・15, II M004-87, 白001-4, 白026-4

・ 4期（9世紀前葉）

I 053-44, II 083-17, II 040-2・6・9, III 174-4

・ 5期（9世紀中葉）

I 007-2・6～8・10・20, I 044-8・26・27・29・30・37・42・66, I 047A-21・22・31, II 059-8, II 065-2,
II 101-5, II 113-5・6・8, II 115-2・5, II 120A-19, II 120B-20, II 128-6・10, II 142-2・5,
II 143-8, II 144-5・6, N201-1・3, III 170-13, III 173-2・7・12, III 188-4・14, III 233-16

・ 6期（9世紀後葉～10世紀前半）

I 055A-4・5・8, II 001-1, II 043-3・7, II 077-3～5, II 093-7・9, II 110-1・16・17・21・28, II
M004-72

各期の実年代について記述する。鳴神山遺跡群では、II 004堅穴住居で「□弘仁九年九月廿カ []」と書かれた墨書土器が出土している。弘仁九年は818年であり、II 004出土土器群は9世紀第1四半期の基準資料の一つと位置づけることができる（文献2・6）。本稿では、4期に相当する土器群である。各期の実年代は、これを定点として、また、近年の奈良・平安時代土器編年の研究成果を基に想定したものである。

1期の資料は常総型の土師器甕1点（Ⅲ222-23）で、胴部中位に穿孔された土器である。時期は、伴出の須恵器蓋杯から7世紀末～8世紀初頭とすることができる。もっとも古い資料が土師器甕であり、杯類

の穿孔と同様の意味をもって穿孔されたものか判断が難しい。

2期の資料は16点で、内訳は須恵器杯14点、土師器杯2点である。穿孔された土器は5点であるが、そのうち、Ⅱ037-1・Ⅱ123B-28は打ち欠きもされている。体部に穿孔されたⅡM004-63は打ち欠きがされているか断定しがたい。なお、この土器には、穿孔部をまたぐ「M」字状の線刻がみられる。同様に体部穿孔のあるⅢ227-2は遺存が悪く、打ち欠きの有無が不明である。残りの11点は打ち欠きされた土器であるが、Ⅲ241-8は遺存が1/2で、穿孔の有無は不明である。穿孔された土器に打ち欠きもみられる傾向は、船尾白幡遺跡でも認められる。Ⅱ095-3は2期の中ではやや降る時期のものである。打ち欠きの無い須恵器高台付杯Ⅱ095-2と重なって出入り口側の壁際中層から正位で出土している。

鳴神山遺跡群では、打ち欠きされた土器は2期からみられる。しかし、遺跡群全体をみると、7世紀後葉から8世紀初頭の堅穴住居は非常に少ない。出現の様相は資料数の多い遺跡で考えるべきであり、ここでは出現時期を断定しない。

3期の資料は19点である。須恵器が10点、土師器杯8点、手捏土器1点である。手捏土器Ⅰ014-9は、体部に穿孔された土器である。Ⅱ020-5は天井部に穿孔が施されたものである。土師器杯のうち、白001-4は打ち欠きの代わりに線刻が施されている。他は打ち欠きされた土器で、そのうちⅡ020-7は全周に及んでいる。Ⅱ141-7は底部穿孔もされている。文字・記号のある資料のうち、Ⅱ020-5は線刻部分に穿孔されている。ⅡM004-87も墨書の一部に打ち欠きが及んでいるがわずかであり、主要部分の方に墨書が多く残っている。また、Ⅱ020-7は墨書を残して打ち欠いている。白026-4の体部内面の線刻は、白001-4同様「U」字状のものである。

1～3期の特徴として、穿孔の施された土器を含む比率が4～6期に比べて高いことを指摘できる。

4期の資料数は6点であり、少ない。しかし、鳴神山遺跡群全体でみた場合、堅穴住居の棟数は3期・4期とも40棟強と考えており、集落が衰退したわけではない。今回設定した4期はやや時期が短く、むしろ集落は隆盛に向かっている。資料数が少ないのは偶然であり、打ち欠きを施す行為は安定的に継続していると考えられる。なお、1点は多数の焼成前穿孔をもつ手捏土器である。

5期の資料数は43点と最も多い。鳴神山遺跡群における集落の隆盛時期と一致する。器種は土師器杯が主体である。打ち欠き土器の中では、Ⅲ188-4が全周打ち欠きと一部の「V」字カットが共存する土器である。Ⅰ044-26も全周に近い。穿孔された土器は、可能性のあるものを含めて5点で、相対的な比率は低くなるが、継続して出土する。

6期の資料数は17点である。5期と比べ少なくなるが、集落の衰退と連動したもので、打ち欠き土器のみが減少したわけではない。穿孔された土器は1点（Ⅱ001-1）あり、継続している。

5. 出土状況

打ち欠き・穿孔土器の出土状況は、出土位置・出土層位とも多様である。他の出土遺物ととりたてて差異のない出土状況である場合も多い。何らかの祭祀行為に使用されたとしても、その後特に他の遺物と区別されることなく、窪地となった堅穴住居跡等に廃棄される場合も多かったと考える。

しかし、中には祭祀行為の痕跡を濃厚にとどめるものや、堅穴住居・カマド廃絶の儀礼に際して意図的

に据え置いたと推定できるものがある。ここではそのような出土状況を示す事例を中心に遺構単位で記述する。

なお、第4図～8図の遺構・遺物図面は報告書から転載したもので、遺構の縮尺は図に記載のあるものを除いて、1/80、遺物の縮尺は1/4である。

① II 157 (第4図)

2期の竪穴住居である。遺存の良い須恵器杯が7点出土しているが、そのうちの5点が打ち欠き土器である。須恵器杯3・8は左前隅部中層から正位で重なって出土した。この2点は打ち欠き箇所が上下で揃った状態で出土しており、この状況からも欠損部が意図的なものであることがわかる⁽⁴⁾。8の底部外面には「日下部吉人」のヘラ書きがあり、3の体部外面にも記号と思われる墨書がある。中層ではあるが、覆土は全体に大粒のローム塊を多く含むことから、埋め戻された状況が明瞭であり、3と8は中位まで埋め戻された時点で据え置かれたものである。須恵器杯4は出入り口部から正位で出土し、須恵器杯5は中央と左前側部分から出土した。これらの土器も3・8同様に中位での出土である。4は3と良く似た墨書が体部外面にみられる。また、須恵器杯6は主要部分がカマド前床面から正位で、破片が左前側上層から出土した。6は口縁部がほぼ全周打ち欠きされている。

II 157における祭祀行為を復原してみる。まず、ほぼ口縁部の全周を打ち欠いた須恵器杯をカマド前の床面に正位で置いた。その後、竪穴中位まで埋め戻した段階で、打ち欠き部をそろえて重ねた須恵器杯2点を左前隅部に正位で置き、須恵器杯1点は出入り口部に正位で置いた。なお、須恵器杯1点を中央と左前部に分割して置き、さらにカマド前の須恵器の破片を左前側部分に置いた。その後、当時の地表面まで埋め戻した。

② I 014 (第4図)

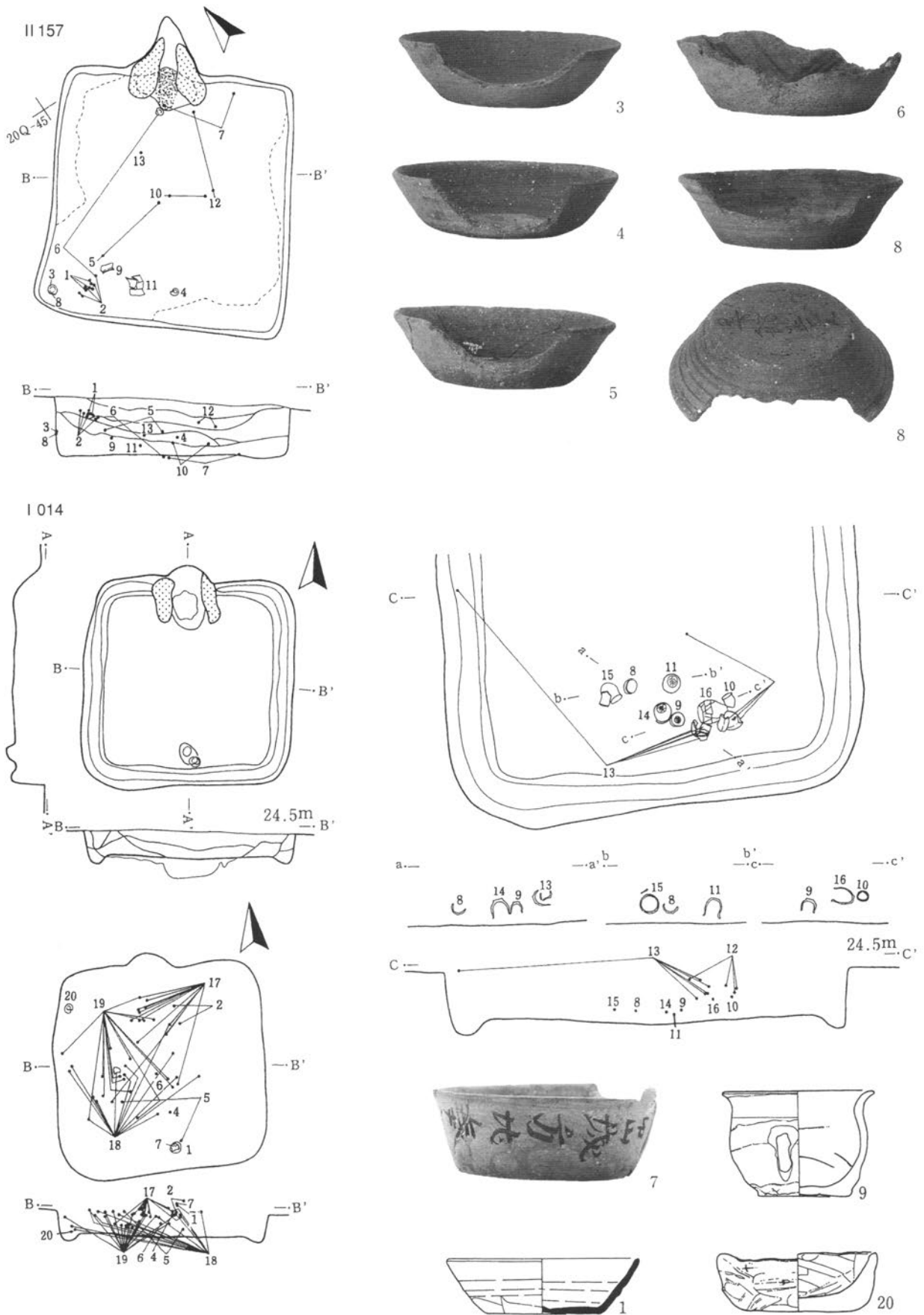
3期の竪穴住居である。出入り口付近から手捏土器を主体とする土器群がまとまって出土した。内訳は、手捏土器7点、土師器甕2点、須恵器杯1点、土師器杯3点(?)である。覆土は埋め戻されている。

手捏土器群中の1点が、胴部に穿孔された9である。9はセットの土器群のほぼ中央、下層から倒位で出土した。他の土器群の出土状況を見ると、9の近くで出土した手捏土器2点(11・14)は倒位、椀形の手捏土器8はほぼ正位、土師器甕2点(15・16)は横位である。個々の土器の出土状況は統一されていないが、手捏土器3点のあり方から伏せるという意識がもっとも強いと考える。

須恵器杯1・土師器杯7の出土層位は確認面近くであるが、出入り口ピット上部から、重なって正位で出土した。1が下、7が上である。7は内外面全面に赤彩が施された杯で、体部外面に「丈尼 丈部山城 方代奉」、体部内面に「丈尼」の墨書がある。土器の器表面は剥離痕があり、被熱痕跡が顕著である。口縁部の一部が打ち欠きされている可能性があるが、整然としたものではない。確認面近くからの出土でもあるので、断定はせず、可能性の指摘にとどめる。1・7と主要な手捏土器群は出土の高さが異なるが、1・7が出入り口ピット上に位置する点からセットの土器群と考える⁽⁵⁾。また、近い位置で出土している土師器杯4・5もセットに加わる可能性がある。

出土位置は離れるが、竪穴住居全体を見た場合、20の手捏土器も関連するものと推測する。20は北西隅寄り、床面からわずかに高い位置から正位で出土した。半分に割れているのは、意図された可能性がある。

I 014における祭祀行為について、復原してみる。居住者は手捏土器・土師器甕・土師器杯・須恵器杯等を使用した祭祀を行った。「丈部山城」・「丈尼」は、祭祀行為に関わる人物名である。土器群には



第4図 II 157・I 014出土状況

神？仏に捧げる食物・酒等が盛られ、宴が催された。祭祀にあたっては、火を使用する行為も行われた。宴の後、出入り口部周辺に手捏土器・土師器甕が埋納された。手捏土器の1点は胴部に穿孔されたもので、神？仏に捧げる意志を表している。手捏土器群等の埋納と同時に、北西隅に手捏土器1点が据え置かれた。当時の地表面近くまで埋め戻した後、出入り口ピットのあった位置に、下が須恵器杯、上が「丈部山城」・「丈尼」の墨書土器を重ねて正位で安置し、祭祀行為は終了した。

「丈尼」の墨書土器から、祭祀行為の内容は仏事であった可能性もある。しかし、古墳時代以来の手捏土器が多く使用されていることから、仏事的な要素があったとしても、純粋に仏教的なものではなく、在来の信仰と融合した姿をみることができる⁽⁶⁾。

③ I 063 (第5図)

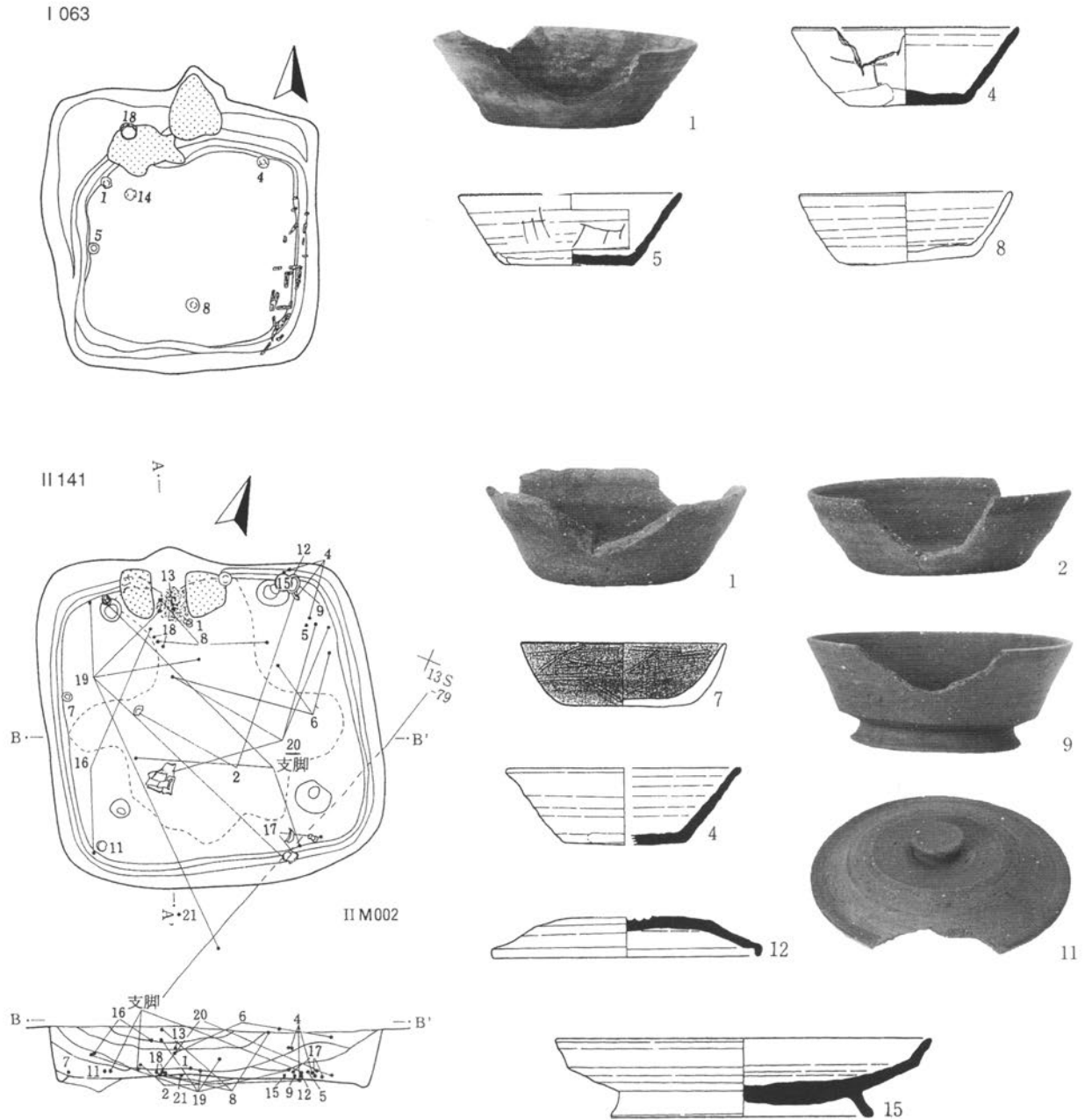
3期の竪穴住居である。打ち欠き土器は須恵器杯1で、北西隅の床面から正位で出土した。他に遺存の良い土器が竪穴内の各所から出土している。須恵器杯4は北東隅の床面から正位で出土した。整然とした欠損でないため、打ち欠きとしなかったが、口縁部に欠損がある。この欠損部に線刻がかかっている。須恵器杯5は西壁際中央の床面から倒位で出土した。この土器にも体部外面に線刻がある。土師器杯8は南壁側中央の床面から正位で出土した。また、土師器小型甕14が北西隅、1の近くの床面から横位で出土した。

以上の土器のうち、須恵器杯3点、土師器杯1点の4点の土器は、竪穴住居廃絶時に北西隅・北東隅・出入り口部・西側に据え置かれたものと考えられる。西側に置かれた須恵器杯は、他の3点が正位の出土であるのに対して、倒位であることから、他の3点とは別の意味があるものと考えられる。須恵器杯1と合わせて、北西隅から西側にかけての空間がより重視されていたものと推測する。土師器小型甕については出土位置がカマドの近くでもあり、杯群のセットに加わるか断定しがたいが、須恵器杯2点の出土状況からその可能性を考える。打ち欠きについては、セットの土器群の1～2点に施し、祭祀用の土器群であることを明示したものと理解する。

④ II 141 (第5図)

3期の竪穴住居である。打ち欠き土器6点のうち、須恵器が5点である。北東隅に土器が集中している。その中心は須恵器高台付杯9と須恵器高台付盤15で、この2点は隣接して床面から正位で出土している。また、9に接して須恵器杯2の打ち欠きされた破片が出土した。他に打ち欠きは不明であるが、須恵器杯1点(4)、須恵器蓋1点(12)がある。15は打ち欠きが5箇所と多い。9も2箇所ある。2の主要部分は西側中央寄りの下層から倒位で出土した。底部内面に線刻がみられる。西壁際中央やや北寄りの床面では、土師器杯7が倒位で出土した。この土器は底部穿孔された可能性もあり、被熱痕跡が顕著である。全面赤彩されている。須恵器杯1はカマド前の下層から正位で出土した。この土器は打ち欠きが3箇所みられる。須恵器蓋11は南西隅の下層から倒位で出土した。

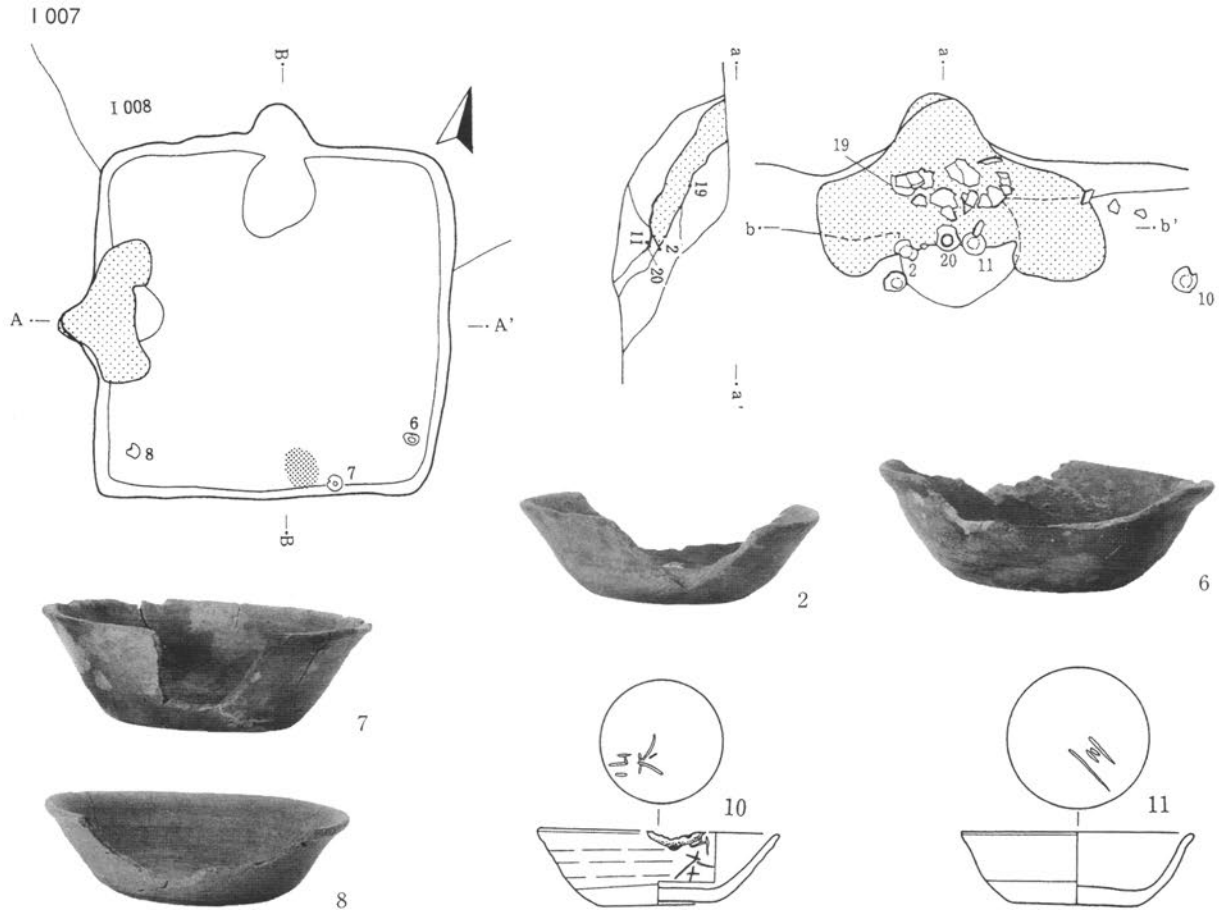
II 141では、竪穴住居の廃絶に際して、北東隅・西側・南西隅に土器が配置された。北東隅は土器が集中して置かれた。置き方は不明なものもあるが主要土器は正位である。逆に、西側・南西隅の土器は倒位である。また、西側中央寄りに主要部を置いた土器については、打ち欠いた小破片を北東隅に持ってきている。カマド廃絶に際しては、3方打ち欠きされた須恵器杯1点がカマド前に正位で置かれた。北東隅の土器集中地点はカマドの右脇でもあり、左脇に比べてやや広い。この竪穴住居ではこの部分に土器が保管されていたものと考えられる。土器集中もそのような状況と関係するものと推測する。



第5図 I 063・II 141出土状況

⑤ I 007 (第6図)

5期の堅穴住居である。打ち欠き土器は6点と多く、I 007出土杯皿類のかなりの割合を占める。なお、打ち欠きの可能性のある土器が他に1点ある。打ち欠き土器としたもののうち、土師器高台付皿が1点で、他の5点は土師器杯である。出土状況を見ると、杯8が南西隅の床面近くから正位で出土した。また、杯6・7は南東隅周辺の床面近くから出土した。6は正位で、7は正位か倒位か判然としない。以上の3点は底部内面に「大加」の線刻があり、8は体部外面にも正位で「大加」の墨書がある。杯10は北西隅の床面近くから正位で出土した。この土器は新カマドに近い位置でもある。底部内面に「山本」の線刻があり、体部外面にも「山本」の線刻が正位で見られる。体部外面の線刻は打ち欠き部にかかっている。西壁中央に位置する新カマド内にも打ち欠き土器がある。土師器高台付皿20は火床部中央部から倒位で出土し、杯



第6図 I 007出土状況

2はその左脇から同じく倒位で出土した。打ち欠き土器としなかったが、20の右脇から土師器杯11が正位で出土している。口縁部がわずかに欠損するほぼ完形の土器で、底部内面に記号と思われる線刻がみられる。20は被熱痕跡が顕著であり、支脚に転用された土器である。しかし、支脚として使われていたとしても、最終的には他の土器とともにカマド廃絶儀礼に使用されたものと考えられる。打ち欠きもその時点で実施された可能性が高いと考える。

I 007の祭祀行為を復原してみる。カマド廃絶にあたり、カマド内に1点の土師器高台付皿と1点の土師器杯が倒位で置かれ、1点の土師器杯が正位で置かれた。倒位の土器はこの時点で打ち欠きされた。また、竪穴住居自体の廃絶にあたり、計4点の打ち欠きされた土師器杯が、北西隅・南西隅・南東隅の隅部3箇所の床面近くに置かれた。置き方は1点が判然としないが、3点は正位である。

⑥ I 044 (第7図)

5期の竪穴住居である。出土土器は多量で、打ち欠き土器としたものも8点を数える。

内訳は須恵器長頸壺が1点で、他は土師器杯である。出土状況を見ると、まず須恵器長頸壺66が南西隅壁溝上、ほぼ床面と同じ高さから正位で出土した。打ち欠きは口縁部の全周に及ぶものと考えられる。他に欠損はない。

土師器杯では、出入り口部である東壁際中央の壁溝上で4点の土師器杯がまとまって出土した。4点の土器は左右に2点ずつあって、左側のものはかなりずれているが上下に重なって出土した。右側の2点は

重なってはいないが、ほぼ接する近さから出土した。左右の土器群の間はわずかに離れている。左側の2点が打ち欠き土器である。下が杯30で、下層から正位で出土した。上が杯42で、中層から倒位での出土である。30は底部内面と体部外面に正位で「大」の墨書がある。42も体部外面に正位で「大加」の墨書がある。右側の2点は打ち欠きがされていないが、左側の2点とセットといえる。ともに下層から正位で出土しているが、壁際の杯35の方がやや高く、左側の2点と似た状況である。35は底部内面に「大加」の墨書があり、墨書内容も30・42と共通性がある。

その他の打ち欠き土器の中では、杯8が南西の柱穴内上部から正位で出土した。内面に黒色処理がされた土器で、底部内面に「鬼□」の線刻、体部外面に正位で「富」の線刻がある。打ち欠きは口縁・体部から底部のかなりの部分まで及び、「鬼」に続く文字の大半が割り取られている。ここまで打ち欠きが及ぶと、食物・酒等を入れる器としての機能は維持しがたく、「鬼□」の線刻を割って入れることに目的があったものとする。ただし、柱穴に入れる以前の器機能を否定するものではない。なお、「鬼」の文字を残した方を意図して柱穴内に入れたものと推察する。

杯27は南西柱穴の近く、カマド左袖前の床面から正位で出土した。底部外面に「富」の墨書がある。杯26は北壁際東寄りの壁溝上から床面と同じ高さで出土した。正位か倒位か不明である。体部外面に正位で「大加」と思われる墨書がある。杯29は南東隅の床面から正位で出土した。体部外面に横位で「成」の墨書がある。その他、杯37は杯26に比較的近い平面位置での出土であるが、層位は上層である。底部内面に「七」、底部外面に「知益」の墨書がある。

その他、打ち欠き土器か認定しがたいが、この竪穴住居では底部内面に「馬牛子皮カ身體カ」の墨書がある土師器杯が存在する。ただし、出土層位は上層である。

I044の祭祀行為を復原してみる。この竪穴住居は廃絶にあたり、柱穴を抜き取っている。そして、そのうちの1箇所線刻部分で割って「鬼」の文字を残した土師器杯片を正位で入れている。カマドは西カマドであるが、カマドを上部にした平面図を見た場合、左奥の柱穴である。出入り口部には4点の土師器杯が置かれ、そのうちの2点が打ち欠き土器、3点が墨書土器である。また、3点は正位で置かれたが、1点倒位のもものが混じり、正位の杯の上にずらして重ねられた。口縁部の全周を打ち欠いた須恵器長頸壺が南西隅に正位で置かれた。また、打ち欠きされた土師器杯がカマド左袖前、南東隅、北東隅から中央寄りの地点で、いずれも床面に置かれた。カマド前と南東隅のものは正位であるが、北東隅に近いものは不明である。以上の土器群がセットで竪穴住居・カマドの廃絶儀礼に関わるものとする。なお、埋め戻されているか判然としないため、上層から出土した打ち欠き土器や多文字の墨書土器が上記の土器群と関係するか不明である。

⑦N201 (第7図)

5期の竪穴住居である。土師器杯1が出入り口側の南壁側右寄りの下層から正位で出土した。打ち欠き部は2箇所、接合するが、出土状況図から対向する位置が意図的に打ち欠きされたものとする。体部外面に横位で「衣」の墨書があるが、1箇所の打ち欠きが墨書に及んでいる。土師器鉄鉢形土器3は南壁左側で、1よりもやや中央寄りの床面から正位で出土した。体部外面に正位で「佛」の墨書がある。口縁端部にわずかな欠損があるが、外面から内面側に向かって打ち欠きされたものとする。打ち欠きは墨書にかかっていない。須恵器甕4は破片が床面に刺さった状態で出土したことが報告されており、意図的な破壊の可能性が高い。カマド前やや左寄りの位置である。この須恵器に近接して出土した土師器杯2も底



第7図 I 044・N201出土状況

部中央の打撃によって破壊された可能性がある。あるいは底部穿孔が意図されたのかもしれない。下層から横位の出土である。カマドの遺存が悪く、特に向かって左袖部の遺存が悪いのは、これらの土器と関係するのであろうか。土師器甕5は底部が中央部、破片がカマド内から出土している。意図的な行為か断定しがたいが、可能性を完全に否定することもできない。なお、覆土が埋め戻されているか、判然としない。

N201の祭祀行為を復原してみる。竪穴住居廃絶にあたり、仏事的色彩の強い祭祀行為が行われた。まず、仏に饗応する飲食行為が行われ、その後、口縁部がわずかに打ち欠きされた鉄鉢形土器が出入り口のある壁側左寄りの床面に正位で置かれ、右寄り下層中には2箇所打ち欠きされた土師器杯が正位で置かれた。また、土師器杯と飲食に使用された須恵器甕が破壊されて、カマド前に置かれた。この土師器杯は底部穿孔の可能性もある。

⑧ II 110 (第8図)

6期の竪穴住居である。土師器杯4点の打ち欠き土器の他に、完全に破壊された須恵器大甕(28)が出土した。杯16は打ち欠き部が接合した土器である。主要部分は北西隅の床面から正位で出土しているが、打ち欠きされた破片がカマド内から出土している。体部外面に正位で「本家」の墨書がある。杯1は杯16の近く、西壁際北寄りの壁溝上で、床面と同じ高さから正位で出土した。打ち欠き部は2箇所、口縁部は欠損の方が多い。断面に油煙が付着しており、灯明器としての使用が打ち欠き後も行われた土器である。なお、打ち欠きは芯を固定するための実用の範囲を超えるものである。杯21は南壁中央際の中・上層からの出土である。報告書では体部穿孔のように図化されているが、穿孔に見えるところは打ち欠きに伴う打撃の痕跡である。

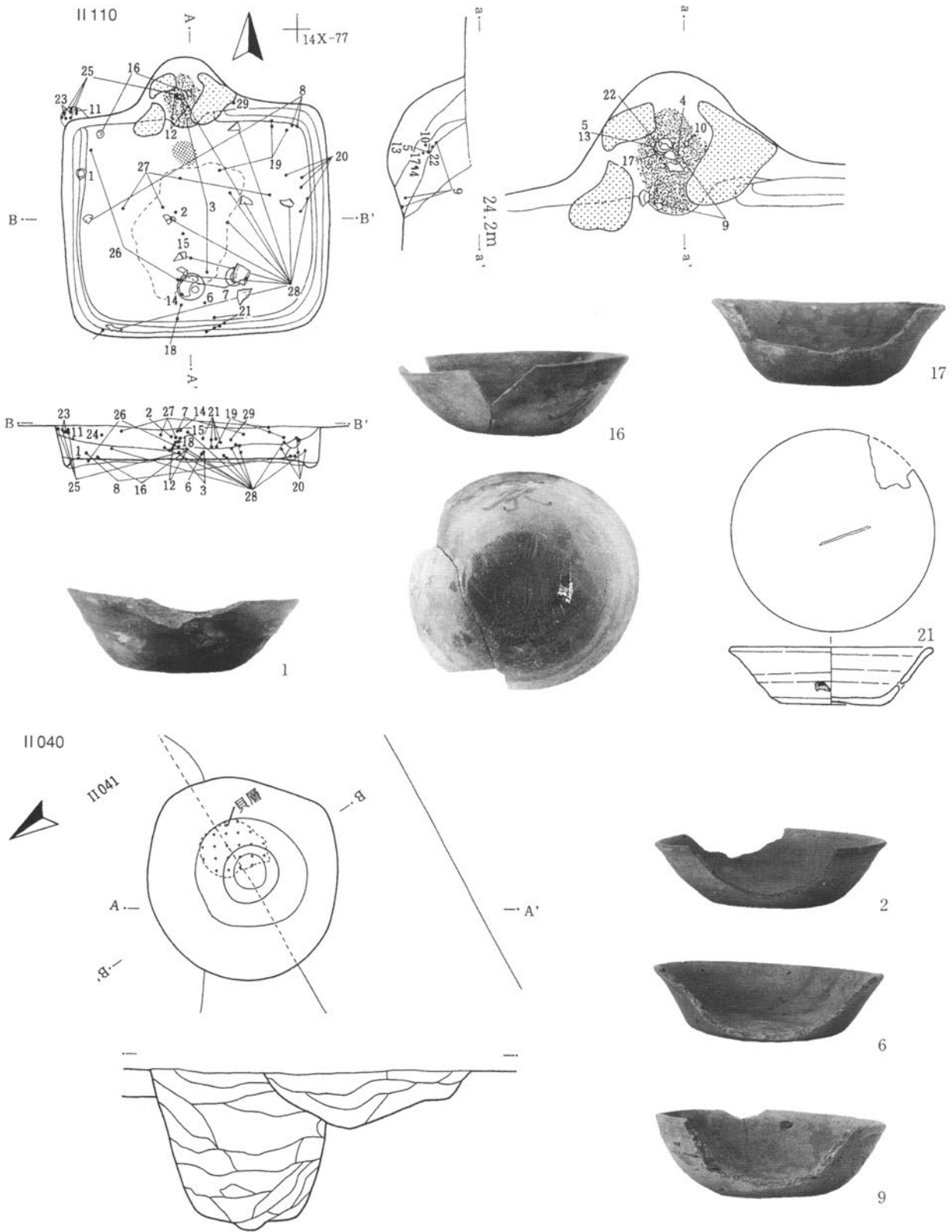
II 110は解体後焼却された家屋である。炭化材・焼土が多量に出土しており、その上から破碎された須恵器大甕の破片が出土した。破片はカマド内、北西隅、南西隅等広域に散っており、意図的にまかれたものとする。

杯17はカマド内から出土した5枚重ねの土器の1点である。5点はすべて倒位で、17は上からも下からも3番目の土器である。5点の中では最も大型の土器である。17を含めて被熱痕跡が強いことから、支脚に転用されたことが確実である。ただし、17の打ち欠きはカマド廃絶に際しての祭祀的なものとする。

II 110の祭祀行為を復原してみる。カマド及び竪穴住居廃絶に際して、それまで支脚に転用されていた土器の1点(以上?)を打ち欠きし、再びカマドに倒位で納める。「本家」の墨書のある土器を打ち欠いて、本体は北西隅の床面に正置し、打ち欠いた破片はカマドに納める。この土器の本体近くには二方を打ち欠いた灯明器も配している。上屋の解体・焼却後、破碎した須恵器大甕の破片を竪穴内に広く散布しているが、破片の散布もカマド内や隅部等の要所に配することが意識されたと考える。

⑨ II 040 (第8図)

II 040は井戸状遺構または氷室である⁽⁷⁾。覆土中層から上層にかけて多量の遺物が出土しており、9世紀前葉に行われた祭祀に伴う一連の遺物と理解する。覆土中層から馬の頭部とみられる獣骨が出土し、獣骨の直上からは土器が集中して出土した。土器集中の上部からは貝ブロックが出土し、さらにその上部の覆土上層からも土器群の出土が続く。打ち欠き土器は土器集中の中央部付近から出土した。須恵器杯1点(2)、土師器杯2点(6・9)で、9は非ロクロの杯である。2はほぼ倒位、6は正斜位、9はほぼ正位の出土であるが、土器集中の出土状況はあまり整然としたものではなく、傾きはさまざまである。ただし、獣骨そばの杯は伏せてあり、一部は置き方が意図された可能性がある。土器は無台の杯皿類だけでなく、



第8図 II 110・II 040出土状況

土師器高盤や甕・甑類、須恵器壺もあり、多様な器種がある。ただし、手捏土器は含まれていない⁽⁸⁾。須恵器甕などは割れてばらばらの状態で出土しており、完全に破壊して散布されたものである。なお、獣骨下の土層もローム粒・塊主体でしまりが弱く、覆土はすべて埋め戻されたものである。何点かの墨書土器が出土しているが、その中に「大国玉罪」があり、祭祀行為が在地神にかかわるものであることがわかる⁽⁹⁾。

Ⅱ040の祭祀行為を復原してみる。在地神に供物や犠牲獣をささげ、集団の構成員の罪をあがなう祭祀行為がⅡ040の近くで挙行された。この祭祀行為は集団の飲食行為を伴うものである。Ⅱ040にかかわる祭祀行為について、祭祀挙行者は、まず覆土中位まで埋め戻し、次に生け贄となった獣（馬か）の頭部を「大国玉神」に捧げ、宴席で使用した土器類等を犠牲獣の上に投じた。このとき神に捧げる器であることを明示するために、一部の土器に整然とした打ち欠きを行った。また、須恵器甕など大型土器については、完全に破壊した。埋め戻しを行いつつ、土器集中の上部に食した貝殻を投棄し、その上部にも土器を廃棄した。そして、表土面まで埋め戻して祭祀行為が終了した。

以上の祭祀行為は、遺構・出土遺物の内容・量から1棟の竪穴住居を超えた集団全体に関わるものである⁽¹⁰⁾。

6. 考察

前項で打ち欠き・穿孔土器の良好な出土状況例をみた。まとめると以下の通りである。

- 竪穴住居からの出土は、家屋・家族の祭祀や個人の祭祀に伴う遺物であることを示す。
- 井戸状遺構（または氷室）からの出土は、集団に関わる祭祀にも使用されたことを示す。
- 複数個体で使用される場合、セットとなる土器の内容は杯類を主とする。
- セットの杯類は墨書土器や灯明器の他、何も手を加えられていない土器もある。
- セットの土器は杯類以外では手捏土器や須恵器甕、須恵器長頸壺などもある。井戸状遺構（または氷室）では土師器高盤や須恵器甑・土師器甕など多様な器種がみられる。須恵器甕類は完全に破壊され、破片が遺構内に散布される。
- セットの土器はカマド内やカマド周辺、出入り口部、隅部等に置かれる場合がある。
- 祭祀行為に伴う饗宴行為がうかがえる場合がある。
- 被熱痕跡や灯明器の状況により、祭祀行為の中に火の使用が含まれる場合がある。

出土状況について、さらに検討を続ける。2期のⅡ157においては、セットの土器のうち須恵器杯3・須恵器杯8が主体である。その理由として、2枚に重ねて打ち欠き部をそろえていること、土器自体が「日下部吉人」の人名ヘラ書き及び記号墨書をもつ内容であること、をあげる。この2点の土器は前側の左隅部にあり、周辺に土器も集中する。方位からみると西隅である。他の土器では、須恵器杯4が出入り口部を押さえ、須恵器杯6が西隅だけでなく、カマドを押さええている。この竪穴住居で、問題は「日下部吉人」である。ヘラ書きであることで、生産地側の人名と解釈することも一理ある（文献2）。しかし、出土状況及び他の土器とのセット関係から、発注者の表示、すなわち集落側の人名と理解する。

3期のⅠ014では、須恵器杯1・土師器杯7が出入り口ピット上方から出土している。また、その下部

から手捏土器等が多く出土したことからも、出入り口部に対する意識が強い。一方、手捏土器20を配して、北西隅も押さえている。

出入り口部に対する意識の強さは5期のI044からもうかがえる。また、この竪穴住居では右奥隅を除く（正確には不明とすべきか）他の三隅部周辺やカマド周辺にも土器を配している。特に左奥隅周辺は、須恵器長頸壺があることに加え、柱穴から「鬼」線刻土器が出土したこと、カマド前の土器も左側であることから、祭祀行為が重厚であり、出入り口部と並んで重視された空間である。カマドが西カマドであるので、方位で記すと南西隅となるが、北カマドの竪穴住居における北西隅と同等とみなして良いと考える。

II110は多彩な出土状況であるが、やはり北西隅部周辺が他の隅部よりも重視されている。また、隅部とカマド周辺出土土器が接合する状況は、主体が逆であるが、II157と同様である。作法に共通性があるといえる。

I063も須恵器杯1・5の存在から、北西隅周辺の空間が重視されている。土師器甕14がセットの土器であるならば、それはより強まる。

北西隅よりも他の隅が重視されている事例としては、II141がある。この竪穴住居では、北東隅からまとも土器が出土した。なお、西壁際北寄りから出土した土師器杯7の位置は、I063の須恵器杯5・II110の土師器杯1と似ている。共通する作法が存在する可能性がある。

土器が配置された竪穴住居内の各場所を検討する。カマド内に土器を伏せて置く行為の意味は、諸氏により、カマド神の封じ込めであると指摘されている（文献6・11・12）。鳴神山遺跡群の出土状況を見ると、土器は倒位のものだけではなく、正位のものもみられる。この正位の土器の中には、カマド神に酒肴を盛った土器あるいはその意思表示のための土器があると理解する。正位の杯には、もてなすことでカマド神を引きとめる意味を、倒位の杯には、カマド神を封じ込める意味を考える⁽¹¹⁾。これはカマド神が家族の贖罪を天帝に報告するのを阻止する信仰と結びつくものである。なお、土器上に実際に酒肴が盛られたかどうかの証明は難しい。しかし、もし土器だけを供えたとしても、その土器はカマド神にふるまいを施す象徴であると考えられる。

静岡県駿東郡長泉町的場遺跡SB9竪穴住居では、カマドに向かって左袖内から倒位の手捏土器が、右袖から正位の手捏土器が出土した（文献13）。船尾白幡遺跡SI024でも、カマド左袖前床面から打ち欠きされた倒位の土師器杯、右袖前床面から正位の土師器杯が出土している（文献1）。このようなカマド祭祀における倒位の土器と正位の土器のセットは、広範な地域で普遍性をもつ可能性がある。

出入り口部も重視された場所の一つである。古代の人々は出入り口部を人や物が出入りする場所というだけでなく、神仏や祖霊、疫神や悪鬼など精神的な何ものかも出入りする場所と考えていたと推察する。このような場所に土器（酒肴を盛った土器とすべきか）を配することは、祭祀行為の重要な要素であった。

中世の史料であるが、『春日権現験記絵』に描かれた図の中に、以上のような古代人の精神世界を考える上で参考になると思われるものがある。それは、鬼が屋根の上から家の中にいる病人の姿を覗き込んでいる図であるが、この家の戸口の前には、祭祀的な事物が設置されている。その状況を記すと、絵に向かってもっとも左側に塞の神と思われる石が置いてあり、石の前には黒髪をはさんだ幣串が立てられている。串の前には方形の敷物があり、敷物の四方には供物を入れた土器が供えられている。また、供物の右側には、敷物を三方に囲んで、半円状の縄が置かれている。そして、縄の右側では火を焚いている、というものである⁽¹²⁾。この祭祀施設の存在により、鬼は家の中に入ることができない状況の図と理解されている

(文献15・16)。この絵図は生活している住まいの状況の表現である。一方、遺跡は廃棄された状況である。その違いはあるが、この絵図が表す状況と、鳴神山遺跡 I 014住居や I 044住居の遺物出土状況には、通じるものがあると考ええる。



隅部周辺の土器の出土状況を見ると、特にカマドに向かって左奥隅が重視された状況がうかがえる。カマドの設置位置は北壁である場合が多く、その場合左奥隅は北西隅となる。

このような北西隅に対する信仰については、平川南氏が論じている(文献17)。平川氏は岩手県水沢市胆沢城出土の木簡や文献史料の分析から、官衙や屋敷の西北(戌亥)隅に簡素な神殿・神屋が設けられ、戌亥隅神が祭られていたことを明らかにした。また、八木勝行氏は平川氏の分析視点をうけ、静岡県藤枝市御子ヶ谷遺跡(志太郡衙跡)から出土した「戌亥隅神」墨書土器を紹介し、さらに御子ヶ谷遺跡・藤枝市萩ヶ谷Ⅱ遺跡の検討から、郡家の神殿遺構の存在を具体的に明示した(文献18)。

官衙の神殿遺構と推測できるものは東京都武蔵国府関連遺跡においても、見つかっている(文献19)。1067次調査で検出された掘立柱建物は、方形の溝で二重に囲まれている。内側の溝の規模は東西15m、外側の溝の規模は東西30mである。建物はあまり大きなものではなく、内側の溝に区画された内部には、この建物以外に存在しない。つまり、この建物だけが外界から隔絶された特別な空間に存在するのである。この遺構は国衙の西北に位置するが、遺構の内容や周辺の状況等により、戌亥隅神を祭った武蔵国府の「社」遺構と考えられている(文献20)。この遺構の西方近隣地点の竪穴建物等からは、「神」・「戌」等の墨書土器が出土しており、この点が「社」遺構と考える根拠の一つである。このうち、「戌」墨書がある須恵器杯は9世紀代のもので、「戌」は口縁・体部内面に正位で記されている(文献21)。この須恵器杯は口縁・体部の一部を欠くが、ほかには割れもなく、遺存が比較的良好な土器である。欠損部の割れ口は弧状が連続したような形であり、打ち欠きされたものと考えられる⁽¹³⁾。神に捧げるため、完形品の一部を故意に打ち欠いた土器であり、「戌」は器や供物・酒などを戌亥隅神に捧げることを明示したものと理解する。

鳴神山遺跡集落にみられる西北隅の祭祀行為は、このような郡家や国府の状況と整合するものであり、戌亥隅神の信仰が奈良・平安時代の集落においても存在すると考える。

この戌亥隅神の信仰については、三谷榮一氏が後々の時代まで日本の各地に存在することを論じている(文献22)。三谷氏は各地の膨大な民俗例を紹介し、また、古代から近世にいたる文献史料にみられる戌亥隅神の信仰を明らかにした。三谷氏によれば、祝福をもたらす祖霊神は季節風の吹く西北方向から来訪し、家屋においては戌亥の隅に降臨する、という。さらに、「家々で祭祀が行はれる折には、まずもって、その場所を讃めたたえたい」と記している。三谷氏の取り上げた豊富な事例の一つに、安房郡千倉町白間津に所在する日枝神社の祭礼歌があるが、以下にその一部を引用する。

「其のや米を酒にして戌亥の角に亀七つ、七つの亀を見てやれば、酒の泉がわきいずる 。其のや酒呑む人は老いも若きも残りなく、命長かれ、末繁盛 」

亀は甕の宛て字であるという。この歌詞から、家屋の北西隅に酒を入れる容器があったことがわかる。なお、七つという数については、古くからの吉数であり、必ずしもこだわる必要はないという。

さて、この歌詞の内容と I 044から出土した須恵器長頸壺が符合するのではないだろうか。ただし、I 044は西カマドであり、須恵器長頸壺が出土した位置は南西隅である。その点が弱点であるが、家屋に入ってカマド左奥隅の空間を特に神聖な空間とみなして良ければ、この場合の南西隅を北西隅と置き換える

ことが可能と考える。このような観点からみていくと、I 063の土師器甕14も非常に気になる存在である。また、I 014の手捏土器20については、意図的に北西隅に置いたものと理解する。

以上、奈良・平安時代の集落に存在する打ち欠き・穿孔土器について、下総国北西部に所在する鳴神山遺跡群の様相を検討してきた。口縁・体部の全周を打ち欠く土器の存在については、先述したように荒木志伸氏が東北や九州の遺跡においても存在することを指摘している（文献5）。また、口縁・体部の一部を「V」字状・「U」字状に打ち欠く土器については、新潟県上越市一之口遺跡西地区の報告を行った坂井秀弥氏が、早くに平安時代の井戸から出土した土器2点の図を提示している（文献23）。坂井氏はこれらの土器の欠損状況を意図的な破損と想定し、井戸廃棄の際の祭祀との関連を考慮している。

以上のことから、口縁・体部の一部から全周を打ち欠く土器は、日本の多くの地域に存在することが予想される。もちろん、地域的な差異も予想される所であり、房総北部の一遺跡群の様相が普遍性をもつのか、もたないのかは今後の検討課題である。

註

(1) 第1表に未掲載で、打ち欠きの可能性のある土器は下記の通りである。

I 007-9, I 024-1・3, I 025-2・3, I 033-15, I 034-19, I 047A-17・18, I 054-3, II 004-1, II 021-3, II 035-1, II 036-6, II 080-3・7・8・9・10, II 082-7・8, II 084-7・8, II 101-13, II 120AまたはII 120B-15, II 123B-21, II 123C-37, II 125-1・2・3, II 127-10・11, II 144-7, II 149-9, II 175-16, III 170-11, III 174-43, N197A-1, N197B-25, III 238-41

このうち、III 238-41は文献4に所収され、それ以外は文献2に所収されている。

(2) II 037-1は報告書では帰属する竪穴住居がII 036とされているが、出土位置はII 037とII 036の境で、むしろII 037に入っている。他の出土遺物の様相からもII 037に帰属する遺物とする方が妥当であり、本稿ではII 037-1に変更した。

(3) II 123B-28が出土した周辺は3棟の竪穴住居が重複しており、遺物が混在している。II 123B-28は2期の遺物であるが、II 123Cが同じ時期の竪穴住居である。II 123B-28はII 123Cに帰属する可能性があるが、出土位置が離れているので断定し難い。第1表では出土遺物は報告書のままであるが、時期は遺物の示す時期で記載している。

(4) 船尾白幡遺跡SI058出土土器に同様の例がある（文献1）。

(5) I 014竪穴住居出土遺物の一括性については、既に郷堀英司氏が指摘している（文献7）。

(6) 鳴神山遺跡群における手捏土器を用いる古墳時代以来の祭祀については、笹生衛氏が指摘している。（文献8・9）。

(7) この遺構を擬制的な井戸とする田形孝一氏は、報告書中で中山晋氏から氷室の可能性があるとの指摘を受けたことも述べている。本稿ではその当否を問わず、今後の検討課題とする（文献2・6・10）。

(8) 笹生衛氏は、この土器集中が、手捏土器を使用する伝統的な祭祀とは区別されていた可能性があることを指摘している（文献8・9）。

なお、II 040の祭祀行為の意義について、笹生氏からご教示をいただいた部分がある。

(9) 「大国玉神」については、犠牲獣が馬とみられることと遺構の状況から、水神の性格を含む存在の可能性はある。

(10) II 040の祭祀行為について、報告者の田形孝一氏は集落全体にかかわる祭祀と推定している。一方、笹生衛氏は、集落内の有力者などの特定集団単位で行われたことを推定している。このような祭祀行為が集落内のどのレベルにまで及ぶものかは、他集落の事例を総合的に検討したうえで、見極めるべき問題であろう。筆者にとっては今後の検討課題であるが、ここでは、1棟の竪穴住居レベルを超えた集団全体にかかわるものだけ認識しておく（文献2・6・9）。

(11) 船尾白幡遺跡においても、同様の意味を考えられる事例がある（文献1）。

(12) 絵図にみられる事物の解釈は、文献14・15による。

(13) 「戌」墨書土器については、東京都府中市郷土の森博物館で平成17年2月5日～3月13日まで開催された「ここまでわかった武蔵国府」展において実見した。

文献

- 1 糸川道行ほか 2004 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI—印西市船尾白幡遺跡—』 (財) 千葉県文化財センター
- 2 鳴田浩司・田形孝一 1999 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書II—印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡—』 (財) 千葉県文化財センター
- 3 石田清彦 1999 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書III—印西市白井谷奥遺跡—』 (財) 千葉県文化財センター
- 4 萩原恭一 2000 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XIV—印西市鳴神山遺跡III・白井谷奥遺跡—』 (財) 千葉県文化財センター
- 5 荒木志伸 1999 「墨書土器に見える諸痕跡について」『お茶の水史学』第43号
- 6 田形孝一 1996 「集落から村落へ(1)—古代東国村落復元へのアプローチ—」『研究連絡誌』第47号 (財) 千葉県文化財センター
- 7 郷堀英司 1994 「鳴神山遺跡群出土の文字資料」『研究連絡誌』第40号 (財) 千葉県文化財センター
- 8 笹生 衛 2002 「東国古代集落内の仏教信仰と神祇信仰」『祭祀考古学』第3号 祭祀考古学会
- 9 笹生 衛 2004 「古代村落における祭祀の場と仏教施設—東国の事例から—」『季刊 考古学』第87号 雄山閣
- 10 中山 晋 1996 「古代日本の「氷室」の実体」『立正史学』第79号
- 11 栗田則久ほか 1988 「馬場遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書IV(佐原地区1)』 (財) 千葉県文化財センター
- 12 平川 南 2003 「屋代遺跡群木簡のひろがり—古代中国・朝鮮資料との関連」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館 初出は『信濃』第51巻第3号 1999
- 13 井鍋誉之 2003 『的場遺跡』財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 14 澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編 1990 『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第四巻 平凡社 (新版第一刷は1984年)
- 15 大脇 潔 1999 『日本の美術1 No.392 鴨尾』文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館
- 16 西垣晴次 1983 「民衆の宗教」『日本民俗文化体系 第4巻 神と仏 = 民俗宗教の諸相=』小学館
- 17 平川 南 2003 「古代の内神」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館 初出・原題は「古代の内神について—胆沢城跡出土木簡から発して—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集 1992
- 18 八木勝行 2002 「駿河国志太郡衙の「郡家内神」について—御子ヶ谷遺跡出土の墨書土器をめぐって—」『考古学論文集 東海の路』『東海の路』刊行会
- 19 中山真治ほか 2002 『武蔵国府の調査22—平成11年度府中市内調査概報—』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 20 江口 桂 2004 「古代地方官衙における「社」に関する一考察—武蔵国府跡発掘の方形区画遺構の検討から—」『白門考古論叢 稲生典太郎先生追悼考古学論集』中央考古会・中央大学考古学研究会
- 21 江口 桂ほか 2004 『武蔵国府の調査26—平成8年度府中市内調査概報—』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 22 三谷榮一 1987 『日本文学の民俗学的研究』有精堂 (初版は1960年)
- 23 坂井秀弥ほか 1986 『上越市春日・木田地区発掘調査報告書II—一口遺跡西地区』新潟県教育委員会